草創期から現在までの 日本映画の 変遷

日本映画の歴史は、そのまま大衆生活の移り変りの歴史でもある。初期の新派悲劇、時代劇に喝采を贈った人々は、やがて長く辛い戦争の時代に送り込まれ、映画もまた戦時色を濃くしていった。敗戦後、一大娯楽産業を誇った映画の黄金時代を迎えたが、テレビの出現によって映画観覧者数は年毎に漸減。そして現代、日本映画界は新世代への転換が行なわれつつある。それぞれの時代に人々はどう生き続け、映画は何を語ったのか。


筑波雪子


栗島すみ子　環歌子　岡田時彦　柳さく子　尾上松之助

●草創期から大正時代まで

日本での映画初公開は、明治29年、今から約80年前までさかのぼる。キネトスコープ神戸神港倶楽部での上映がそれで、フィルムは、ニューヨークの街頭、汽車の走る様子、パリのダンスホール、テムズ河畔の実写等だったと言われる。以後、風景実写、演劇実写の時代が20年程続く事になる。この時代のスターは何と言っても、尾上松之助こと〝目玉の松ちゃん〟。明治42年に早くもその主演第一作「碁盤忠信」を、牧野省三の演出で撮り上げた彼は、以後遺作となった「俠骨三日月」(大正15)まで、実に千本近くもの映画で、目をむいて力演する事になった。

大正8年に発表された帰山教正の手になる「生の輝き」は、いわゆる純粋劇映画の最初の作品。これを機に劇映画は続々と量産されるようになり、大正デモクラシーの運動の一環として、谷崎潤一郎、小山内薫なども、積極的にこの世界にとびこんでいった。

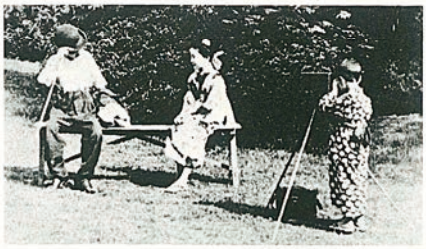
大正10年頃には、それまでの女形にかわり女優が出現、特に「虞美人草」(大正10)で世に出た栗島すみ子は、日本映画初の女優スターとなった。日活、松竹が既に創立され、早くもその会社カラーを鮮明にした作品が作られ、人気を博した。いわば映画黎明期とでもいう時代である。

代表的作品

「豪傑児雷也」等〝忍術映画〟

明治後期から大正はじめにかけて、作られた〝目玉の松ちゃん〟主演シリーズ。〝トンボ松〟と異名をとった彼の身軽な動作が、広く大衆に支持され、子供達のアイドルとなった。二重露出による〝特撮〟の元祖的作品。





「生の輝き」(大正8・脚本帰山教正)

若い貴族と化学者の娘、若い化学者の三角関係をあつかい、貴族が身を引き、あとの2人が結ばれるという話。モダニズムのパイオニア、帰山らしい作品だった。出演は、木田実、花柳はるみ等、新劇畑の若手達。

「路上の霊魂」(大正10・監督村田実)

松竹創立初の作品。自由を求めて家出した芸術家の青年が、夢破れ、妻子を連れて帰宅するが、青年の父は許さず、父子争い、息子の死を呼ぶ。自然主義リアリズムを生かした演出が、今日の松竹調の基礎を形作った。





「虞美人草」(大正10・監督ヘンリー・小谷)

養母にいじめられる娘と、無線電話の発明に励む青年技師の悲恋物語。やるせなく、か細い〝大和撫子〟型のヒロイン、栗島すみ子の主演で未曽有の大ヒットを記録した。これによって日本映画は女優時代開幕を告げた。



「雄呂血」(大正14・監督二川文太郎)

阪妻こと阪東妻三郎のプロダクション第二作。善意の行動がことごとく裏切られ、世をすねた武士が、遂に捕手多勢を相手に大乱闘を展開する。血気盛んな妻三郎は、全巻の3分の1近いシーンを暴れまくって大喝采。

●昭和初期
—近代化の時代



この時期は、前時代の大スター尾上松之助の死という象徴的な事件から開始を告げる。また、同時に始まった内務省による全国統一検閲により、映画が大きな規制を受けるようにもなった不幸な時代である。

しかし、映画自体はますます発展、量産主義体制に入り、企業として大きくなっていった。そんな中で、阿部豊、牛原虚彦といった監督たちは、都会趣味のアカ抜けた恋愛映画を作り、モダニズムの旗手とうたわれた。また時代劇には、伊藤大輔、マキノ正博といった青年監督が出現、女の強さへの期待を主とした現代劇に対抗して、男の弱さや屈折を好んで描いていった。さらには、当時国土を覆っていた大不況の閉塞状況を象徴的にあらわした衣笠貞之助監督の実験映画「十字路」。

これらの運動は、やがて〝傾向映画〟と呼ばれる一連の社会批判映画へと転化、その先がけになったのが、内田吐夢監督の「生ける人形」だった。強烈なアジテーションを身上としたこの作品群と表裏一体の〝小市民映画〟で、やわらかい風刺を貫いていった小津安二郎のデビューもこの頃である。サイレントからトーキーへ、時代の流れとともに映画自体が、大きな模索を強いられた時期。

代表的作品

「浪人街」(昭和3・監督マキノ正博)

マキノ監督20歳の頃の伝説的名作。爛熟期の大江戸の裏街に巣喰うごろん棒どもの無気力、無節制、無反省の毎日の中に、独得のエゴイズム、ニヒリズムが漂う、いわゆる〝集団劇〟のパイオニア的作品。





「マダムと女房」
(昭和6・監督五所平之助)

本格的トーキー映画の先駆となった松竹作品。劇作家夫妻(渡辺篤・田中絹代)が、隣家のジャズの音に悩まされたあげく、家庭争議を起こすが、再び元のサヤへ。お得意の小市民喜劇に音を加え、大きな話題を呼んだ。



「何が彼女をさうさせたか」
(昭和5・監督鈴木重吉)

大恐慌の発生下にあって、5週上映という大ヒットを生んだ。貧しい少女(主演高津慶子)が、親類からサーカス団、養育院、ブルジョワの家庭を転々、次第に世の中に反抗するようになっていく。傾向映画の代表作品。

「十字路」(昭和3・監督衣笠貞之助)

喧嘩で盲になった弟と、美貌が故に周囲の誘惑と戦う姉の、貧しい生活をめぐる悲劇。表現派風の簡素なセットを使って、すべて夜間撮影の人工光線下で製作した実験映画。時代劇ながら剣戟シーンが一切ないのが特徴。





「丹下左膳」(昭和8・監督伊藤大輔)

大河内伝次郎、山田五十鈴、沢村国太郎とけんらんたるスター達の共演。三百万両の埋蔵地を示す地図を入れたコケ猿の壺をめぐって、善人、悪人、丹下左膳入り乱れての大争奪戦がくり広げられる。原作林不忘の映像化。

●戦時下から終戦までの時代


長谷川一夫


入江たか子


小杉勇


高峰三枝子


上原謙


藤田進


山田五十鈴


佐分利信

トーキー映画の確立とともに、商業主義映画が、急速に盛んになっていく。昭和12年松竹株式会社が正式に発足、また同年には、東宝映画株式会社も設立、昭和17年には、日活製作部門を併合して、大日本映画製作株式会社（大映）が創立と、後の日本映画勢力地図が、ほぼ固まった時代でもある。

だが、それは同時に初期の溝口健二作品「浪花悲歌」などの文芸映画流行を除いては、時代とともに歩んだ国策映画の歴史でもあった。昭和14年、亀井文夫監督の「戦ふ兵隊」が、反戦的内容を理由に上映中止になったのをきっかけに、戦争映画は国威発揚、愛国の二つのテーマ追求に腐心するようになっていったのだ。そして敗戦という大きな悲劇。

「五人の斥候兵」「土と兵隊」などの野太い作品が生まれた中で、一方「白蘭の歌」「支那の夜」「蘇州の夜」といった大陸ロマンスものが出現、メロドラマの世界にも、戦時色が濃くにじみ出ていたのは、当然と言えば当然の話。

ただ、そんな中でも長谷川一夫、山田五十鈴の「婦系図」、エンタツ、アチャコのコメディ、古川緑波の活躍等が観客を湧かせ、厭戦気分の清涼剤となった事は特筆される。

代表的作品

「浪花悲歌」（昭和11・監督溝口健二）

それまで明治の女を描き続けていた溝口監督が、初めて現代の女に目を移したもの。電話交換手の山田五十鈴が、父の為に妾に身をおとす。そして始まるとめどない淪落。リアリズム映画の古典として内外に高く評価された。



「エノケンの法界坊」（昭和13・監督斎藤寅次郎）

浅草ボードビルで名をあげた榎本健一が、一座とともに東宝へ入社しての第1回作品。飄々とした小悪党の法界坊を、わがエノケンが生き生きと演じ、日本には珍らしいスラップスティック式の滑稽劇を成功させている。



「愛染かつら」（昭和13・監督野村浩将）

花も嵐も踏みこえて〜、そのテーマ曲が一世を風靡したメロドラマの大ヒット作。青年医師上原謙と、看護婦田中絹代の美男美女が、自己犠牲とスレ違いの繰り返しの後、遂に結ばれる。原作川口松太郎。



「海軍」（昭和18・監督田坂具隆）

大本営海軍報道部企画の、太平洋戦争2周年記念作品。鹿児島の商家に生まれ、江田島の海軍兵学校を経て、念願の海軍に入り、後に特殊潜航艇に乗りこみ、戦争に一命を捧げた一青年将校を英雄的に描いた。



「ハワイ・マレー沖海戦」（昭和17・監督山本嘉次郎）

太平洋戦争開戦1周年記念映画。若い海軍士官が厳しい訓練によって、きたえられていく過程を中心に、パールハーバー、マレー沖二大戦闘を大がかりな特撮で再現した。軍国主義的作品だが、その迫力は圧倒的だった。



●戦後の時代、昭和30年代初頭まで



戦意昂揚映画から、再び娯楽映画の配給へと。敗戦１週間後に封切られた作品は五所平之助監督の「伊豆の娘たち」。しかし検閲は内務省から米軍情報部へ移っただけで、依然として続けられ、228本もの作品が、上映を禁止された。

戦犯映画人追放、東宝分裂による新東宝発足、東宝大争議と、混乱が続く中、昭和26年に黒沢明監督が「羅生門」をひっさげ、ベニス映画祭でグランプリ受賞、翌年には溝口健二が「西鶴一代女」で同監督賞を受賞と確実に復興が進んでいく。

かくて昭和29年に東映が「笛吹童子」、「紅孔雀」という二大少年向け時代劇の大ヒットをとばし、映画は国民的娯楽の頂点へ立つ事になる。中村錦之助、東千代之介といった新しいスターに加えて、日活に石原裕次郎、赤木圭一郎、小林旭などが現われ、男性娯楽映画全盛時代が現出したのが30年代前半。

昭和33年には映画人口は史上最大の12億2,745万人を記録、国民１人あたり年間12、３本の映画を見たという黄金期が訪れたのである。だが、以後、テレビの出現によって、映画界は急速な衰退を見せていく。復活から隆盛、そして谷間へという時代である。

代表的作品

「羅生門」（昭和25・監督黒沢明）

戦後日本映画のひとつの金字塔。芥川龍之介の原作「藪の中」を借りて、黒沢明が撮り上げた、不信の時代への告発劇として、余りにも有名。三船敏郎、京マチ子の熱演、宮川一夫のカメラ、橋本忍の脚本と戦後勢力の結集。





「東京物語」
（昭和28・監督小津安二郎）

笠智衆、東山千栄子扮する老夫妻が、地方から上京して、成人した子供達の家をたずねる。善意ではあるが、しかしどこかで迷惑げな子供達に２人は軽い失望をおぼえて郷里へ帰る。松竹調家庭劇が作った最高傑作。



「紅孔雀」 五部作
（昭和29～30・監督萩原遼）

ヒーロー那智の小四郎、ヒロイン久美、悪党されこうべ党首領の一角、海賊網の長者、美剣士浮寝丸。武芸合戦、忍術くらべ、宝物さがし、と、少年達の心を踊らせた新諸国物語のシリーズ。当時のヒット記録を作った。



「嵐を呼ぶ男」
（昭和33・監督井上梅次）

おいらはドラマー、やくざなドラマー、の主題歌で、石原裕次郎が、そのスターイメージを確立した作品。女流マネージャー北原三枝に見出されたドラマーが、音楽界の内輪もめをかいくぐって成功する野性派映画。



「二十四の瞳」
（昭和29・監督木下恵介）

瀬戸内海に浮かぶ小豆島を背景に、高峰秀子が若い女教師と、その中年期を力演。12人の教え子達との心あたたまる交流が、全国の涙を誘った。「皆んなが泣いた」の宣伝文句は、メロドラマの原点として伝えられる。

●転換期から変貌期 — 現在まで



この時期、映画興行は急速に悪化の一途をたどっていくことになる。だが、作品的にはまさに百花撩乱の時代が開花するのだ。

先ず昭和35年には、松竹ヌーベルバーグと称せられる20代監督大島渚、吉田喜重、篠田正浩らが華々しくデビュー。同時にそれは、昭和生まれの演出家の時代が到来した事を意味していた。昭和36年には、ＡＴＧが創立され、以後、羽仁進、勅使河原宏、熊井啓、黒木和雄といった若手の活躍が続いていく。

東映は、時代劇から任侠映画への移行を図り、10年にわたる全盛時代の中で、高倉健、鶴田浩二、藤純子等のスターを生み出し、定着した深夜興行とともに、広く大衆の共感を得て行った。そして、それに連なる「仁義なき戦い」を頂点とする実録路線の出現。

日活はアクション路線から、若い監督、俳優が突出、渡哲也、原田芳雄を筆頭に、ニューアクションを展開。営業不振の為、昭和46年に一旦製作を中止したが、たちまちロマンポルノ路線で復活、今に至っている。また同年倒産した大映も49年に新会社として復活、地道な活動が評価される。東宝の大作路線の成功も加わって、今、日本映画界は確実に新世代への転換が行なわれている時期なのだ。

代表的作品

「日本の夜と霧」
(昭和35・監督大島渚)

'60年安保闘争の総括を映画で行なおうとした異色作。全篇を貫かれる激しいディスカッションは、その劇的な構成とあいまって大きな衝撃をまき起こした。政治を正面にすえたテーマがヌーベルバーグの台頭を助長する。



「日本沈没」(昭和49・監督森谷司郎)

列島沈没という一大スペクタクルに、若い操艇士の恋や、１億国民を救おうと腐心する首相、学者らの苦悩と活躍をおりまぜて描いた、初の配収20億円突破作品。特撮の東宝の伝統はこの作品に脈々と生きていた。



「男はつらいよ」シリーズ
(昭和44・監督山田洋次)

我らがフーテンの寅さん、毎度ながら美女に恋してはフラれ続けてはや20本目。日本映画史上にも珍らしいシリーズの不倒記録を樹立、なお、その人気は衰えるところを知らない。山田洋次監督の名とともに忘れ得ぬ傑作群。



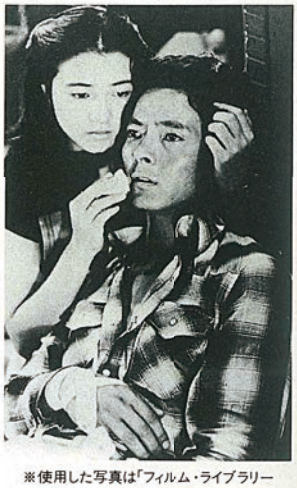


「昭和残侠伝」
(昭和40～47・監督佐伯清他)

高倉健、というより健さんと呼ぶ方がピッタリの彼。その名物シリーズのひとつとして、不動の人気を誇った。〜泣いてくれるな、おっ母さん、背中のイチョウが泣いている〜学園闘争のもじりにも使われた、時代の象徴的映画。

「青春の殺人者」
(昭和51・監督長谷川和彦)

戦後生まれの監督が、初めてキネマ旬報賞を受賞した作品。親殺しという異常なテーマを扱いながらも、水谷豊、原田美枝子といった若い俳優が、みずみずしい青春を好演。新ヌーベルバーグの出現を予感させた。



※使用した写真は「フィルム・ライブラリー協議会」・田中純一郎氏提供